

豪州・大学対抗ミートジャッジング競技会で日本代表チームが活躍 —牛肉食味品質部門で準優勝、個人でも上位入賞—



ジョン・ディーで牛枝肉の見方を学習する日本チーム

2010オーストラリア（豪州）大学対抗ミートジャッジング競技会が6月29日～7月3日までの5日間にわたり、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州アーミデール市にあるニューイングランド大学と同市郊外のカーギルオーストラリア社牛肉工場で開催された。豪州国内の8大学、米国の1大学に加え、日本からも畜産を学ぶ大学生の代表5人が参加し、団体の牛肉食味品質部門で準優

勝を果たすなど好成績をあげた。

競技会は豪州の食肉格付け規格（MSA）に基づき枝肉や部分肉を判定すること、豪州や米国ではスーパーなどの小売段階で普通に丸ごとのトップサイド（内もも）やTボーンステーキが並べられていることから、日本チームには不利な条件による“戦い”だったが、それを乗り越えての上位入賞は快挙といえる。



◀団体・牛肉食味品質部門で第2位入賞を果たした日本代表チーム。左から山之上稔・神戸大学准教授、高山世絵梨さん（日本大学生物資源科学部動物資源科学科2年）、鈴木喬之君（麻布大学獣医学部動物応用科学科4年）、加藤啓介君（帯広畜産大学生物資源科学科動物資源科学科4年）、石川悠未さん（宮崎大学農学部食料生産科学科4年）、清水俊策君（神戸大学1年）君、コーチのケート・ニースさん（MLA東京事務所）



①ラム枝肉の格付けのトレーニング②ジョン・ディーで牛枝肉の学習した後、ウォーレン・ステフ工場長と記念撮影③ACCでMSA格付けの現場で研修④夕食後も勉強する学生たち⑤スーパーの食肉売り場でリテイル(小売)カット⑥食肉科学や豪州食肉産業などのレクチャーが連日続いた



日本代表チームは今年3月に東京で開催された第2回全日本大学対抗ミートジャッジング競技会 (ICMJ) (主催：ICMJ実行委員会＝会長：金井幸雄・筑波大学生命環境科学研究科教授)で優秀な成績を収めた上位5人と、コーチとしてMLA (豪州食肉家畜生産者事業団) 東京事務所のケート・ニースさん、実行委員会の引率者として神戸大学大学院農学研究科の山之上稔・准教授の7人で構成。

このICMJは、大学などで畜産学を学ぶ学生に、①食肉格付の理論および実際の評価技

術を学ぶ機会、②食肉産業分野の新しいテクノロジーに触れる機会、③消費者のニーズや期待に触れる機会をつくとともに、成績優秀者をオーストラリアに派遣し、海外の食肉市場に対する理解と知見を深めるとともに、国際コミュニケーション能力を高める機会を提供することにより、わが国の食肉業界の将来を担う人材の養成に資することを目的に行っており、今年で2回目の派遣となる。

代表チームは、豪州中東部のブリスベン市郊外のミートパッカー「ACC (オーストラリア カントリー チョイス) 社」で牛のと畜・処理、枝肉格付け、部分肉製造、包装工程を視察した。

その後、南下し、ワーウィックにあるミートパッカー「ジョン・ディー社」でオーストラリアの格付規格 (MSA) に基づき、本番さながらにトレーニングを行った。6月30日と7月1日は、会場のニューイングランド

▼個人総合部門第2位の加藤啓介君

▼個人食味品質部門第1位の石川悠未さん



⑦競技会の後、ケートさんから解説を聞く学生⑧チーム総合優勝したチャールス・スチュアート大学の学生らと記念撮影⑨競技を終えて判定した枝肉の前で⑩20年間、実行委員長を務め感謝状が贈られたジョン・カーターさん(左)と来年から引き継ぐ予定のマイケル・ラウリーさん⑪4頭の枝肉を品質の良い方から順位を付ける問題。答は編集手帳で



大学でワークショップ、食肉科学や豪州食肉産業についてのレクチャー、ミートジャッジングのトレーニングとハードなスケジュールをこなした。夕食後も連日深夜まで復習する熱心ぶりだった。

競技会では、牛、豚、ラム枝肉各4頭を観察して、歩留まり、マーブリング、肉色などにより優劣の順位を付ける、牛肉の食味品質をPHや月齢、性別などで判断する、4つのプライマルカット（大分割部分肉）の優劣の順位をつける、その理由を英語で記述する、などの各部門により、その目利きぶりを競い合った。

ここ過去2年間は個人、団体とも米国勢の活躍が目立っていたが、今年の豪州大会は、1991年に第1回を開催してから20回を数える節目の大会とあって、豪州勢が奮闘。チーム総合優勝はチャールス・スチュアート大学ワガワガキャンパス、個人総合優勝がマー

ドック大学のララ・ブルグスタットさんが獲得した。

引率した神戸大学大学院農学研究科の山上稔・准教授は、「MLAの支援により日本の学生がオーストラリアの大会に参加したのはこれで5回目だが、今年は昨年に続き日本代表チームということで参加した。日豪の格付基準の違いや英語での質問、回答という壁もあったが、学生たちは夜遅くまで復習してがんばり、立派な成績を残すことができた。日本の大学の畜産関係学科のネットワークづくりや国際的な視野をもった食肉業界の人材育成につながることを期待したい。日本代表チームの派遣に協力いただいたMLAをはじめ、日本大会の開催にあたり協賛、支援していただいた畜産団体・会社に感謝したい」とコメントしていた。

(近田 康二)